

塩 辛 田 古 墳 調 査 概 要

昭 和 5 3 年 2 月

袋 井 市 教 育 委 員 会

位 置

国鉄東海道線袋井駅から北北西へ直進する主要地方道袋井春野線は駅から500mで静橋のたもとにいたり、ここで原野谷川を越えて500mの地点で国道1号線と直交する。ここから東へ折れて国道1号線を1800m行くと、左手に油山寺へ行く道が分岐する。この道は北へ650mの地点で東名高速道路のガードをくぐり、さらに250m北進すると右手に小さな谷があり、その奥に東側を土取りで削られた枝尾根が西へ突き出て小高く残っている。その頂きはこぶ状に円く高まっているが、ここが塩辛田古墳である。地籍は袋井市国本字塩辛田997番地の1に属する。(注)

(注) この古墳はこれまで西ノ谷古墳と仮称されてきたが、地籍に従って塩辛田古墳と呼ぶのが正しだろう。西ノ谷は東名高速道路を越えて東南方に位置する谷の名で、その奥を又六ノ谷といい塩辛田古墳東方の土取りされた地域である。

調 査 の 経 過

1. 調査の契機

今回静岡カントリー袋井コース開発工事にあたって、開発区域内における農地の一部が山林地域と交換され、当該山林地域を新農地に造成することとなり、土地所有者からなる西ノ谷塩辛田農地造成共同施行組合の代表者福島喜六氏から、袋井市教育委員会へ塩辛田地内にある古墳推定地の発掘調査の依頼があつた。教育委員会では組合と協議した結果、両者で委託契約を締結し、日本考古学協会員久永春男氏に調査担当を依頼し、昭和52年10月20日付袋教社第195号文書で文化庁へ埋蔵文化財発掘届を提出した。そして、昭和53年1月23日より昭和53年2月10

日まで発掘調査を実施する運びとなつた。

(袋井市教育委員会

社会教育課係長 金 原 久 雄)

2. 調査日誌抄

昭和53年

1月23日(月) 晴れ

西ノ谷、塩辛田地域の地形の現状を踏査する。古墳推定地の一部地域の雑木の下刈りを依頼する。

市及び組合作成の地形図と現地の状態とを比較し検討する。

古墳推定地は西ノ谷古墳と仮称されてきたが、実際の地籍は国本字塩辛田997番地の1に属する。

1月24日(火) 雲りのち雨

墳丘の測量を開始する。

等高線の単位は250m。

午後は雨のため中止。

1月25日(水) 晴れ

墳丘の測量を継続する。

1月26日(木) 晴れ 風あり冷

墳丘の測量を継続する。

風強く、冷えきびしく仕事がはかどらず。

1月27日(金) 晴れ

午前中に墳丘測量を終る。

内部構造の発掘に備えて測点を三ヶ所設置する。

午後、墳丘の写真撮影を行なう。

1月28日(土) 晴れ

墳丘測量図を補正する。

盗掘坑を検討する。東へやや片寄っており、内部構造の西端は残存しているように思える。盗掘の時期について、近隣の人に問い合わせたが知る人なし。出土品についても不明。

1月30日(月) 晴れ

墳丘測量図をトレースし、青写真を作成する。

1月31日(火) 晴れ

古墳周囲の測量を行なう。

盗掘坑付近の下刈りをする。

2月 1日(水) 晴れ 風あり冷

盗掘坑を発掘清掃する。

西へ開いたY字型で、南側の枝坑には遺構なし。北側には埋藏土坑をそのまま掘り下げていった。しかし推定どおり土坑の西端は未掘であつた。埋土中より土師器片4片検出。

2月 2日(木) 晴れ

土坑西端に残存する埋土の写真を撮る。ついで埋土を縦断し、南側を掘って写真を撮り、測図する。ひきつづいて、北側の残存埋土を除去する。

午後、土坑の床面の清掃に着手したところ、盗掘坑の床面よりもさらに100m下部に真の床面が存することがわかり全面的に掘り下げた。

2月 3日(金) 晴れ 冷えきびし

土坑の平面図、横断面図、縦断面図を作製する。

2月 4日(土) 晴れ

土坑の実測図を補正し、トレースして青写真を作成する。

2月 5日(日) 6日(月) 7日(火)

測図を検討しつつ、報文を執筆する。

2月 8日(水) 晴れ

焼きあがった写真を検討し、報告書に使用すべきものを選ぶ。

2月 9日(木) 晴れ

墳丘の写真を補足撮影する。

報文の経過の執筆を行ない、文化庁へ提出する概報を清書する。

2月10日(金) 雨

焼きあがった写真を検討し、必要なものを引き延ばし、報告書の編集を行なう。そして、完成した文化庁提出概報はタイプにまわす。

墳 丘

墳丘は東から西へのびた尾根先の地ぶくれを利用して営まれており、現状では東と南西と北北西方向がやや突出して三角形気味の不整円形であるが、北東のすそを通る尾根道による崩れを考慮すると東西径、南北径ともに15.5 mを測り、高さは2.5 mである。

標高85.25 mの線で囲まれる墳頂部は直径約4 mで、その中央部南東よりにY字形をなす盗掘坑が掘られ、その南東端は長い尾を引いて、東すそ近くまで深さ約300 m内外の溝をなしている。おそらく墳頂を掘った後、石室の入口をもとめて掘り下げたのではないかと想像される。

墳頂の北東側には地山が露出しているが、南西側にはうすい盛り地がみとめられる。おそらく尾根先の地ぶくれを切り削つて円形に平

面形を整え、墳頂部は北東部が高く南西部が低いので、東北側を削って南西側に厚さ100mばかり盛り地して墳頂平を水平にととのえたものと推定された。

内 部 構 造

塩辛田古墳の埋葬施設は土坑であつた。西が二又をなすY字形の盗掘坑の北側の枝がちょうどこの土坑の南寄り $\frac{3}{4}$ を掘り下げていたが、西より $\frac{1}{4}$ がさいわいに未発掘であつたのと、土坑の下低部が150mの深さで未発掘のまま残されていたので、およそその原形を把握復原することができた。

中軸線を東南—西北におく長円形の土坑で、外縁の長さはおよそ3m、幅は900m～1m、深さは550m～600mである。北西端は250mの深さに長さ200mの半円形の段をつくり、垂直に300m低い下低にいたる。東南端は下半しか残っていなかつたがなだらかに45度位の角度の形斜をなしている。下低面は西北部が幅600mで角ばり、東南部は幅450mに狭まつて円く半円を描いておわっている。床面はほぼ水平である。両側壁は角ばつた隅をつくり、南壁は80度、北壁は40度の形斜をなす。

遺骸は直葬ではなく木棺におさめられていたかと想像されるが、炭火木材など木質物は特に検出されなかつた。

墳丘のいとなまれた地形からいくと東枕の可能性が考えられるが、床面の幅が西北部が幅広い点では、もし割竹形木棺がおさめられていたとすると西枕である可能性が強くなる。しかし、埋土に明瞭な半円形の断面はみとめられなかつたし、掘り型からすると組合せ箱式棺の可能性もないわけでもない。

土坑中央部上半の攪乱埋土中から同一個体とおぼしい土器片が4個

見い出されたが原位置であるかいなか疑わしい。ただし、手つかずに遺存していた下半部からは全然出土しなかつたので、遺骸埋葬後にその上部に供献されたものであろうか。

遺 物

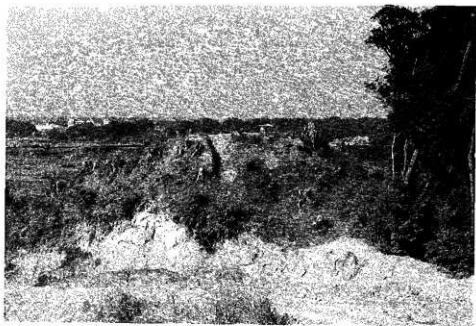
土坑中央部の盗掘によつて攪乱された埋土中から土器破片4片が検出された。そのうち2片は接合し、他の2片は接合できなかつたが、同一個体片と推定された。器形は高杯で、円錐形をした脚部の破片であり、外面は無文で2個の円孔があり、その配置からして元来4個の透かしがあつたものと推定された。

年 代

埋土から検出された土器をこの土坑のいとなまれた時期の物とみなすものとすれば土器片が残缺で断定はできないが、弥生式終末期または土師器初頭の墓葬ということになる。すなわち、古墳形式をとつた墓葬としては袋井市では最も古いもののひとつということになる。

盗掘の際の出土遺物ならびに出土状態がつまびらかでないのが惜しまれる。

圖版



墳丘遠景 (東側)



墳丘 (西側)

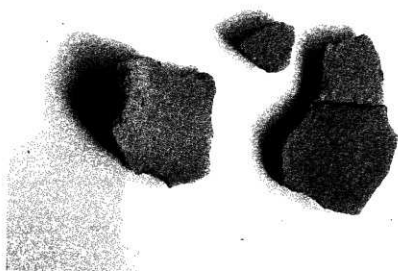


巡掘坑清掃後（南側）



土坑（東側）

土
坑
(西
側)



土 器 片